
剣と書いて初恋と呼ぼう

もち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣と書いて初恋と呼ぼう

【Nコード】

N7985W

【作者名】

もっち

【あらすじ】

少しシリウスと恋愛多め（多分）の作品です。魔法ものでもあります。もちろん、バトルもあります。是非見てください。

物語のプロローグ

ここは日の光もほとんど入ってこない暗い森の中。私は永い眠りから目覚めさせられた。

「起きたか、魔剣」

「はい」

「では、この世界の者たちと同じ形に変換するぞ」

「わかっています」

「《変身・人間》チェンジオブヒューマン」

シルバースが呪文を唱えると私は剣から人の形になる。

私を封印から解くのと私を封印するという2つの役目を持つ魔法使いのシルバース・クラリオが話しかけてくる。シルバースは私を作った張本人で《魔法世界》の住民なのだが、こちらの世界に来たということは向こうで何か問題があったのだろう。でないと、魔装具である私の封印を解くわけがない。

「早速のところ悪いがおまえに頼みたいことがある。先日、《魔法世界》である事故が起こってな」

ほらやつぱりと思いながら私は話の続きを聞く。

「魔蟲リガルがこちらの世界に侵入したらしい。しかも今までのものより強力だそうだ」

魔蟲というのは強悪な性格をしている《魔法世界》の生き物だ。

「それは大変ですね」

「……お前は口だけだな。顔が言っていることと真逆の表情をしているぞ」

「……………」

「まあ、いいがな」

シルバースが言った通り私はなにも大変だとは思ってもいなかった。

私の呼び方でもある魔剣とは、私に選ばれた者でも使いこなせず、

一人で100年以上も魔蟲と戦ってきた《武装具》にだけ与えられる名称。魔劍Ⅱ兵器の証。《魔法世界》では《武装者》^{マスター}がいない《武装具》は兵器扱いになる。それは秘められた魔力を制御せずに自分の好きなように使えるから。町を壊し人を殺すことができるからたとえ本人にそのような気がなくても。

だから、それだけで魔劍という名称を与えられる。周りからも阻害され邪馬物を目で見られる。それを上の位に当たる者たちは利用する。今までも何匹もの魔蟲を倒してきた。例えそれが強力であつてもそんな私にとってこのことは別に大変なことではない。

「それで頼みたいことは？」

「ああ。『こつちの世界でお前の《武装者》を探し、魔蟲を狩れ』とのことだ。今、魔蟲は人間の体に寄生して力を蓄えている。魔蟲はここに来るまでに大量の魔力を消費しているだろうから。だから、魔蟲が本来の姿になるまでに――」

「叩き潰せ」

「そういうことだ」

「《武装者》は探してくれているのですか？」

「いや、特には聞いていない」

「では、私に任せてもらつていいですか？」

「ああ、好きにしろ。だが、こちらの世界の奴らは軟弱な者ばかりだからな。探しても今回もないか、いてもまともに戦えはしないだろう」

「……ですね」

私は今まで何回もこういうことをしてきた。それで学んだのは《武装者》は今まで魔蟲を見たら怖がつてすぐ私を捨てて逃げた。

そのたびに私は毎回一人で戦ってきた。孤独で戦いが終わったら眠りについて。また目を覚まして孤独な戦いをして終わったら眠りについて。

最初は悔しかった。扱いが道具そのものだった。誰も私を人としてみてくれなかった。

でも、それにも慣れた。所詮、私は人の形をした道具なのだから。

（今回も早く終わらせてすぐ眠りにつこう）

私は森を抜けて、魔蟲が舞い降りた町へ下りた。

物語のプロローグ（後書き）

ありがとうございます。次回もよろしく願います。もう一本連載してある「ゴーストハンター 〜言わば神様のパシリ〜」も読んでみてください。

尾城智樹の日常〜学園編〜

本日は素晴らしい晴天。七月の太陽がまぶしい中この俺、おしろと尾城智樹は――

「おい大丈夫か、智樹。おい、聞こえているか」。尾城智樹！
――大の字で倒れていた。

なにも誰かに殺されたりして死んだわけではない。大体ここは学校のグラウンドのど真ん中。こんなところで殺人が起こすバ力はいないだろう。

じゃあなぜか？ それは体力が尽きたから。もう指一本も動かせない状態にある。

「……ああ、目が死んでるな、智樹の奴。先生！ 尾城が倒れたんで保険室まで連れて行きます」

「またか！ ……しょうがない、連れて行ってやれ。あとそのまま帰っていいぞ。今日短縮授業だからこれで授業終わりだしな」
「ういっす」

さつきから俺の状態が日常茶飯事のようになれた対応をしているのは、友達づきあいの悪い俺の数少ない親友の三田力也だ。俺とは違うスポーツ万能タイプで友人も多い。体もごついし男の中の男っを感じた。さらに、風紀委員までやっている。その代わり勉強はまるつきりだめだが。

「よいしょつと」

力也が俺の腕をグイッと引っ張りそのまま肩に手を回す。おかげでなんとか立つことができた。

「お前って勉強はできるのに運動は本当駄目だよな」

返す言葉もない。いや、返す気力もない。

「まあ、いいや。ほれ、着いたぞ。すいませ〜ん、近藤先生、患者を連れてきました」

保健室は運動場の近くにあり、1分もあれば着く。これは俺にと

って大助かりなことだ。

「はいはい。患者さんはまた尾城君なのかしら？」

三田に呼ばれて出てきたのは保険医の近藤凜花先生だ。大人っぽい雰囲気醸し出していて一部の男子から絶大な支持を得ている。だが、俺はこの人が苦手だ。

なぜなら――

「尾城君って本当運動神経はミジンコ以下よね。勉強も少しずば抜けているだけだし……。その脳も誰かにあげて早く死んじやえばいいんじゃないかしら」

――Sだから。

この人なにかしたいんだよ。先生が生徒いたぶってどうすんだよ。今のセリフ結構グサグサ突き刺さっているからな、畜生！

しかも、「また」ってなんだよ。俺が体育の授業の時、毎回ここに来ているみたいじゃないか。……実際に来ているけど。

俺がしゃべれずに心の中で文句を言っている

「なにを言ってるっしやるの、近藤先生！ 智樹さんをいじめないでくだらない！」

今、ドアを開けて入ってきたのは松ヶ谷・ミーティ・梨奈でフランス人のハーフだ。中学校の時から知り合いでこの町で資本家として有名な松ヶ谷家の跡取り娘である。また、松ヶ谷家は代々女性が当主に就くため護身術としてできた松ヶ谷我流の後継者でもある。

「あら、あなたも用事？」

「ええ、そうですわ！ 悪いですか？」

「いいえ、別に何もないわよ」

何か意味ありげな笑みを見せる近藤先生。あ、あれは誰かをからかうときの顔だ。

「それよりあなたも大変よね」

「何がでしょうか？」

思いつきり睨みつけているよ。最近の高校生は怖い怖い。

「なにがって、あなた、尾城君が来るたびにここに来ているじゃない

い」

「ひゃあああああああああ！！」

近藤先生の言葉に重なるように叫ぶと梨奈は石のように固まってしまった。

「あらあら、これは言っちゃだめだったかしら」

「……………」

「先生、これ以上松ヶ谷をいじめないであげてください」

三田がストッパー役を買って出てくれる。

確かにそれには俺も同意見だ。本当なら俺がそれを言わなければいけなかったんだろうけど。

「三田君が言うならしょうがないわね。学校長に言われても困るし」
三田は学校長の曾孫なので三田がこのことを報告すれば近藤先生の首は飛ぶわけだ。大体そう思うなら前からやめてほしい。

「そろそろ尾城君も大丈夫でしょ。教室に戻って家に帰りなさい。他の生徒は帰っていつているわよ。あと、松ヶ谷さんも持って帰ってね」

先生はやることはやり尽くしたような顔でそう言った……。

尾城智樹の日常〜学園編〜（後書き）

ありがとうございました。次回もよろしくお願いします。

事件の噂

学校を出て30分ほど歩いたところにある木紫花駅きしばなに俺と力也はいた。梨奈は用事があるので先に家に帰った。松ヶ谷家の当主と言っただけあって多忙なのだろう。

「いや、今日も友紀は倒れたから絶賛記録更新中だな。たかが1000メートル走っただけで倒れるとかマジあり得ねえわ」

「……うるせえ。将来の就職に運動能力は必要ないからいいんだよ」
「智樹らしい答えだな」

「……軽くバカにしてねえか？」

「してない、してない」

手を振って否定する力也。

まあ、それならいいけど……。

「ただ運動ができないという現実から逃避するんじゃないって意味で言っただけ」

「思いつきりバカにしてるよな!？」

「してない、してない」

「嘘つけ!」

そこまで言っておいて否定する奴は初めて見たような気がする。

「なあ、それよりさ、この後お前の家でゲームしねえか? 新しいソフト買ったんだ」

力也がバックの中からゲームソフトを取り出す。お前風紀委員のくせに校則違反するなよ。

「それは魅力的な誘いだが悪いな。家に帰ったら俺は勉強をするからパスだ」

「また勉強かよ……。お前は遊びより勉強。恋より勉強だもん」
「そこら辺は俺の勝手だろう」

確かに俺は恋をしたこともない。そんなものする必要もないからだ。必要がないことだからな。決して年齢〓彼女いない歴のいいわ

けじゃないからな！

「それにゲームなんかしている余裕とかあるのか？　もう来週はテストだぜ？」

「そう言えばもうすぐテストだっけ？」

「今から勉強すれば少しはましになると思うけど」

幸い今日は金曜日だ。テストが始まるのは月曜日だから土曜日と日曜日の深夜まで勉強したらそこそこはいけるだろう。

「それもそうだな。というわけで智樹、初日の物理のノートを貸してくれ」

「気楽だな、お前は。別にいいけどよ……」

「ありがとうございます、智樹様」

「……ったく」

調子がいい奴だと思いながらバツクの中から物理のノートを探し出す。

………あれ、ないぞ？　確かここに入れておいたはずなのに………。ない！　マジでない！

「どうした？　もしかして、ないとか言わないよな？」

「……そのまさかだ」

「はあ！？　そりやねえぜ！　もう一回探してくれよ！」

「へいへい」

その後もなんとかバツクの中も探すが明らかに見当たらない物理のノート。

「これは完ぺきに学校に忘れたわ」

「マジか……」

力也がガツクリと肩を落とす。

「まあ、そこまで落ち込むなって。他のノート貸してやるから」

「……それもそうだな。それじゃ歴史と数学を頼む」

「ほらよ」

俺はバツクの中から2冊のノートを取り出して力也に渡す。

「サンキュー。で、智樹はどうするんだ？」

「……そうだな……」

このまま家に帰ってもいいけど、歴史と数学は力也に貸したし、物理は学校に忘れたから残りは2教科しかないし……。それじゃあ時間がもったいない。

「学校までノートを取りにいくよ。今から歩いていけば夕方までには家に帰れるだろ」

「そうか。帰りは気をつけろよ」

「わかってる。走らずに歩いて帰るよ」

体力(1000m走ったら限界)がなくなつて勉強ができなくならないようにな。

「いや、そうじゃなくてさ。ほら、最近街中で噂になっている連続吸血殺人事件と連続男子高校生暴力事件のことだよ」

「ああ、その事件のことか」

力也が言う連続吸血殺人事件と連続男子高校生暴力事件は、俺が住むこの町で一番噂になっていることだ。ニュースで聞いたところ、連続吸血事件は『烏丸通り』でその名の通り、血を抜かれた死体が毎晩見つかっているという事件だ。もう一週間も続いている。もう一つの連続男子高校生暴力事件は『修羅通り』で夜に男子高校生が鈍器で殴られ倒れているという事件だ。こちらは被害者は死んでいないが、かなりの深手を負っていて誰も犯人のことを覚えていないらしい。そして、なんで出現場所の名前が両方、不吉なんだ？ 犯人たちは狙っているのだろうか？

「確か智樹の帰り道は『修羅通り』を通るよな。だから夜には犯人に会わないように気をつけろよ」

「大丈夫だ。もし襲われた時は逆にコテンパンにしてやるさ」

「それは無理だろ」

「おい、こら。少しは応援とかないのか？」

「だってお前、体力も力もねえじゃん」

「……フ、舐めてもらったら困るぜ」

確かに力也の言う通りだ。俺には運動能力はゼロと言ってもいい

ほど無い。

某クエストではスライムと同等ぐらいだろう。

だが俺にはスライムとは違ふところがある。まずはこの頭だ。こいつの頭の回転の早さは誰にも負ける気がしない。学年トップの実力は伊達じゃないことを教えてやる。

そして二つ目は――

「――この目だ」

俺が自分の両目を指差しながら自信げに言う。

「目？ お前って目が悪いから眼鏡をかけているんだろ？ そんなものがいったいどこで役に立つんだよ」

フッフッフ。その見方は甘い。俺の好物、小豆抹茶黒あんみつアイスクリームパフェより甘い。力也もそうだが人間は常識にとらわれすぎだ。

「実は俺の眼鏡は視力を抑えるためにかけてあるのだ！」

「はあ？ なんでそんなことしているんだ？」

その質問は聞きあきたよ、力也君。俺は過去にその質問は何回もされたよ。

そしてそのたびに俺はこう答えた。

「裸眼で物を見ると頭痛が激しくてさ。あと、動いているものがすべて遅く見えてなんか自分だけ別世界にいるようで嫌なんだよ。だから、眼鏡をかけてそれらを抑えている――ってどうしたんだ？ 悲しい目をしやがって」

「……智樹、悩みがあつたら遠慮せずに言えよ？」

俺の肩に手をおいて残念な子を見るような目で見られた。

……さてはこいつ、俺が言ったことを妄想だと思って全く信じていないな。

「なあ、力也」

「なんだ？」

「ひとつ言っておくが、さっき言ったことは本当のことだからな。決して妄想とかじゃないからな」

「わかつているから皆まで言うな。……この中二野郎が……」

「おい！ 今明らかにぼそつと中二病つて言っただろう、お前！ なんなら見せてやろうか！」

「わかつた、わかつた。信じているって。俺たち親友だろ？」

今度は真剣な目で見て言うてくれる力也。

「そ、そうか。なら、いいんだ」

どうやら俺の思い過ごしだったらしい。……いや、そうとは思えなかったが親友の力也が信じているって言うてくれたのだから、俺も力也のことを信じてやらないといけないだろう。

「それより早く行かなくていいのか？ じゃないと帰るときには夜になっちまうぞ」

「マジか？」

「マジだ。さつさとして来い」

力也が腕時計を見せてくるとその短針は3を指していた。

「わかつた。じゃあ、先に帰っていてくれ」

「もちろんそのつもりだ。待つ気なんてさらさらないさ」

……相変わらず正直な奴だな、こいつは。

「じゃあ、帰りは気をつけてな」

「おう、わかつている」

「犯人と会っても戦うなよ」

「お前やっぱ信じてないだろう？」

「そんなことないって。じゃあ、明日な。中二病野郎」

「てめえ、やつぱり！」

俺はこの後力也を追いかけようとしたが駅の中の人たちに迷惑をかけると思い、そのまま学校へ向かった。

……力也の奴、月曜日までせいぜい楽しんでおくが……。

事件の噂（後書き）

ありがとうございました。次回もよろしくお願いします。

先輩の勘違いで夫にされかける

「はあ、すっかり遅くなっちゃった」

腕時計を見るともう8時を過ぎていた。

本当なら5時、遅くても6時には家に帰れていたはずなのに、まだ俺は夜の帰り道を歩いていた。しかも噂の『修羅通り』を。

「なんであんなことになったんだろう……」

それを話すには少し時間をさかのぼることになる。

無事、死にかけながらも学校についた俺は忘れ物を取って帰ろうとしたのだが思わぬ問題が起きた。

学校であちこちから用事が回ってきたのだ。

俺はクラスの委員長（勉強ができるからという理由だけで押しつけられた）をやっている。さらに成績は学年トップで違反も呼びだしも食らったことがない。なので、先生や生徒から多大な信頼を得ているため、歩いているだけでいろんなことを頼まれる。

「尾城君、小テストを作ってみたので間違っていないか職員室で解いて確認してくれませんか？」

「わかりました。3分ください」

「ありがとうございます」

「いえいえ。お礼を言ってもらうほどのことでもないですよ」

そう言つと職員室の中に入り、問題を3分で解いて間違いがないことを白河先生に教える。そして職員室を出ようとすると今度は学年主任の首藤先生に話しかけられる。

「尾城、次の学年集会の視界を頼んでもいいか？」

「わかりました。打ち合わせは後日で」

「おう、もちろんテストが終わった後にな」

「はい、それでは失礼します」

俺が今度こそは職員室を出ようとすると、次は新聞部の五月先輩

に呼び止められる。

「智樹く〜ん。この前のテストでもう7回連続で学年トップの君の記事を学校新聞に書きたいからインタビューしてもいいかな？」

ちなみに五月先輩とは結構な知り合いである。なぜかというところ、俺の記事を書くときはいつもこの人が担当になるからだ。私生活でも相談に乗ったり乗ってもらったり（主に俺は聞く方だが）しているほどに親睦を深めている。俺の知り合いの女子の中で親睦度ナンバーワンだ、きつと。

「あ、はい。でも、なるべく手短にしてもらっていいですか？ この後用事があるので」

「あはは、用事って言ってもまた勉強のくせに〜」

「うっ、見抜かれていましたか」

「当たり前じゃん。もう何回インタビューしてると思っているの」

「かれこれ十回以上はしていますね」

「でしょ。それくらいわかるって。ちなみに今の会話だけでも2分は過ぎました」

「本当ですか！？　じゃあ早くお願いします」

「うん、任しといて。それじゃ、質問いくね」

こんな感じで始まった五月先輩のインタビューは途中で会話が弾んだりしてとても楽しいものだった。そして、それから1時間ぐらゐが過ぎた後、五月先輩の取材が終わる。

「――以上で終わりかな。ありがとうね。おかげでいい記事が書けそうだよ」

「そうですか。それは良かった」

「うん、それでね。最後に一つ質問いいかな？」

「どうぞどうぞ、遠慮なく」

時間がないが五月先輩の願いだ。仕方があるまい。

「ありがとう。私の友達にね、友達にだよ？　智樹君のことがカッコイイなあっていう子がいるんだけど……その子に告白されたときいったいどうする？」

「……それって記事に関係ありますか？」

「うっ、関係はないけど……いいじゃん！ 私と智樹君の仲じゃない」

「……まあ、いいですけど」

なぜそんなことを聞くのかは置いて、告白されるということはやっぱ付き合ったりしないといけないのだろう。なら、答えは一つだな。

「丁寧に断りますね」

「なんで！？ なんで！？ もうチャンスがないかもしれないのに！」

今の発言にはどういう意味が含まれているのかじつくりと問い正したいところだが、とにかく自分が思っている通りに言うとうしよう。「俺は恋とかに興味ありませんし、勉強の方が大事だと思っています。それに女子は苦手なので」

「……そっか」

あれ？ 五月先輩のテンションが一気に下がったぞ。俺、なんか悪いこと言ったか？ そう思い少し頭の中で考える。

……あ、言ったわ。しかもついさっき。「女子は苦手」って。それで五月先輩が落ち込んだとすれば……。やばいぞ。相談にも乗ってもらっている人に俺はなんてことを言ったんだ。これはなんとかフォローをしなければ。

「で、でも女子が苦手って言っても五月先輩は違いますよ。苦手なのは親しみの少ない人とかのこと……。むしろ俺、五月先輩のことは好きだと思っていますし」

「……それ本当？」

「はい、嘘をついてどうするんですか。そう言う真剣な交際をするなら五月先輩を選ぶと思いますよ。親しみやすいし、頼りになるし」

「……やだ、智樹君。こんなところで告白なんて」

五月先輩が恥ずかしそうに「きゃっ」とポーズを取ると、周りから俺たちをはやし立てる声が聞こえてくる。

「おいおい、尾城つてば職員室で愛の告白か？ やるねえ」

「尾城君つて思っていたより大胆なのですね」

「先生たちは二人が幸せになることを願っているよ」

そういうことに疎い俺は数秒遅れてやっと気付いた。そういえばここつて職員室だったわけ。そんな中で俺はあんなこと！ ていうか、さっきのつて告白でもなんでもねえ！ そしてこの教職員もノリが良すぎだろ！

とりあえずこの誤解を解かなければ。

「あの先生方。さっきのは告白でも何でもなくですね」

「うん、わかっているよ、尾城。先生たちは黙っておいてあげるから」

「全然わかっていません！！」

俺が先生相手に必死に抗議をしていると五月先輩が抱きついてくる。

「先輩！？ いったい何しているんですか！？」

そんなにぴったりとくつつかれたらいろいろと大事な物の感触が嫌でも背中にはつきり感じる。

「幸せな家庭を築こうね、智樹君」

「ちよつと待ってください、五月先輩！ いろんな過程が飛んでいきます！ いや、それ以前に結婚もしませんから！」

「恥ずかしがって〜、照れ屋さん♪」

五月先輩に頬をぶにつと突かれる。

……この人、本気だ！

それを見た先生がさらに興奮しだす。

「式はいつあげるんだ？」

「先生たちも誘ってね」

「わからないことがあったら言えよ。先生たちが協力してやるから」

「ありがとうございます、先生！」

「だから違うつて言っているじゃないですかあああああああ
！！」

この後も先生たちと五月先輩の誤解を解くために抗議をしたが、結局誤解は解けないまま閉門時間が来てしまい時間だけ無駄にして帰ることになった――。

先輩の勘違いで夫にされかける（後書き）

毎度ありがとうございます。よろしくお願いします

出会いは初恋

帰るときに五月先輩が言ったあの言葉は今思い出しても寒気が止まらない。

『それじゃあまた月曜日にね。おやすみなさい……あなた』

「……………はあ」

月曜日が憂鬱だ……。

でも五月先輩と付き合えるならそうしてもいいのだが、先輩みたいな良い人は俺には勿体ない。それに何回もしつこく言うが恋というものにほとんど興味が無いのだ。

一目ぼれとかするやつはバカだと思っている。恋ができなきゃ死ぬとか言う最近の女子は論外だ。だから、俺は16歳の今にしても初恋をしたことがない。

俺に恋愛感情を持たせることができた奴は女神か天使のどちらだろう。

「ま、そんな存在もあり得ねえけど」

そんな感じで歩いていると後ろから女性らしき声が聞こえてきた。「今から10秒後に斬りかかります。私の太刀を避けてください」

……は？　なんだ、今の殺人発言は。

空耳かと思いい後ろを振り向くとそこには真剣を構えてカウントを始めている女性がいた。

俺はその女性を見たとき真剣に対する恐怖や状況についていけないという混乱よりも一番初めにこう思ってしまった。

美しい……。

夜の暗い道の中。街灯もほとんどついていないこの道で唯一、光を放っていた。

月光に照らされた穢^{けが}れなき白き一輪の百合の花のような美しさを彼女は持っていた。エメラルドの色をした瞳に引き寄せられる。

俺はそんな彼女に目を、いや目だけじゃなく心まで奪われた。多

分この気持ちのことを世間一般ではこう言っんだと思う。……恋…
…と。

そして俺は生まれて初めて——恋をした。

出会いは初恋（後書き）

毎度ありがとうございます。今回は二話同時掲載でいきますので「剣と書いて初恋と呼ぼう」第6話も見えていってください。

いきなり決闘（前書き）

今回中途半端に終わってしまいました。すいませんでした。

いきなり決闘

「9、10。宣言した通り10秒待ちました。それでは試験スタートです」

「え？　つて、うわ！」

名も知らない彼女がその剣を振ると衝撃で俺の横のコンクリートの壁がガラガラと崩れ落ちる。衝撃でコンクリートの壁が壊れるって有り得ねえだろ。

「……死ぬだろ、これ」

「えああああ！」

「ちよつとまじかよ！」

彼女はほとんどわからないくらいのスピードで俺に近づき、その鋭い剣を横に薙ぎ払う。

俺は思い切りしゃがみこんでそれを何とか避ける。すると、壁は見事に一刀両断。きれいに一直線に割れた。

「む、一撃目は避けましたか。でも、本番はこれからです！」

彼女が剣を構えなおす。ちなみに俺は立ち上がり、少しでも軽くするためにバックを投げる。そして、距離を取った場所に移動していた。

「はあ！」

その叫び声とともにさつきと同じ衝撃波が飛んでくる。しかも、めちゃくちゃ速い。俺はさすがにこれには命の危険があると思い、本気で相手するために眼鏡を外す。

すると、その瞬間、目の前を直行していた衝撃波のスピードが遅くなる。いや正確に言えば遅く見える。

「あまりこれは使いたくないんだが……」

この目を使うと頭が痛くなるんだよな。俺もなぜか知らないが。親に聞くと生まれてからずっとらしい。近藤先生にも一度話してみたが、それは動体視力と脳と視神経の伝達が普通の人と比べて5倍

ぐらい良いらしい。

まあ、俺の目の理屈なんかどうでもいいや。とりあえず頭痛が来るまでに彼女を倒そう。誰が好きで初恋の彼女を殴らなければいけないんだ

俺はハアとため息をつきながら衝撃波をひよいと避け、彼女のすぐ近くまで行く。

（近くで見るとさらにきれいだ）

またその美しさに見とれてしまう。

（なんだ、こいつは天使か？ それとも女神なのか？）

時が経てば経つほどこの彼女に対する好意がわいてくる。この彼女のことが知りたくなる。これが人を好きになるってことか……。うん、なかなかいいものだ。さっきまで一目ぼれをする奴はバカだと思っていた自分がバカみたいだ。

「な！？ いつの間に！」

彼女は俺がそばにいることによく、いや向こうからしたら30秒も経っていないから反応は速い方か。

まあ、どっちにしろ気づいたらしくとっさに距離を取ろうとするが、その行動も無駄だ。俺にはそれもスローモーションで見えるから。

女性には手をあげないのが男としての主義なんだが……。今回ばかりは仕方ないな。なるべく痛い思いはしてもらいたくないので一撃で決める。

「悪い！」

構えていた右手でその細い首筋に手刀を打ち込む。

「きゃあ！」

彼女が可愛らしい声をあげると意識がなくなったのかドサッと地面に倒れた。

やっぱ、やりすぎたかな……。

いきなり決闘（後書き）

毎度ありがとうございます。一応次で二人のバトルは終わると思いますので、何卒よろしくお願いいたします。

決着と契約（前書き）

少し文章が長くなってしまいましたが、ぜひ読んでいたださい

決着と契約

おそらく彼女が連続男子高校生暴力事件の犯人なんだろう。普段の俺なら経歴を優先するために彼女を警察に突き出して、感謝状をもらっているところだろう。

でも、今日の俺は違った。頭ではやめておいた方がいいとわかっていても体が言うことを聞かなかった。

「おい、大丈夫か？」

「……………」

返事はない。さすがにあれはやりすぎたか。一応生きているか確かめるために首の脈に指をあてる。

……うん、良かった。脈はまだある。死んでいなかった。

生きていることがわかり、安心した俺はほっと胸をなでおろす。すると、急に彼女が起き上がり、俺を突き飛ばす。

「油断しましたね」

「なにするんだ——って、タンマ、タンマ！」

そのまま倒れている俺に向かって、手に持つ剣を振りおろす。

「終わりです！」

くそ、どうする？　いくらスローモーションで見えるからってこの距離じゃ避けるのは不可能だろう。俺は頭をフル回転させ1つの方法を見つける。失敗したら終わりだけど……これしかねえよな！俺はしっかりとタイミングを計り両手で刀を挟んで止める。

「……ふう、危なかったぜ」

「な！？　完璧に油断していたところを狙ったのに！」

俺に剣を止められたのがよっぽど驚くことらしい。

確かに俺が行った真剣白刃取りはちょっとそこの技術ではできない。これができたのも俺の目のおかげだ。なんとか目の前で止めることができた。

「……さあ、どうするんだ犯人さん？」

「くっ……。なら、こうします!」

「うお!？」

剣にぐつと力を加え、そのまま押しつぶしにかかってくる。

「……ったくなんて力だよ」

本当にこいつは女なのか？ いやいや俺がほれたぐらいなんだから女に決まっている。じゃあなんだ、この馬鹿力は。このままじゃ一刀両断される。

「今度こそ終わりです!」

「やられてたまるか!」

俺は剣を持つ彼女の手を膝で思い切り蹴り上げる。

「いたっ!」

その瞬間彼女の気がそれ、手の力が弱まる。俺はそれを見逃さず彼女の剣をその態勢のまま手から引っこ抜き、後ろの壁に二度と抜けない様に突き刺す。おお、すげえ切れ味だ。

「ああ、なんてことするのですか!」

いきなり剣を取られ倒れこんでいた彼女はすぐさま刀を抜きに行く。

「うっ! うっ!」

必死に刀を抜こうとするが思ったより深く突き刺さっているらしく中々抜けそうになった。

うわあ、必死に頑張っている姿もさっきまでの凜としたイメージとのギャップが激しくて逆に可愛かった。

でも、このまま放っておくと――

「抜けて! 抜けてってば、あ!」

「ほら、言わんこっちゃない」

急に壁からすっぽ抜けたのでその反動で倒れそうになる。わかりやすく言ったらあれだ。二人で一つの棒を精一杯引っ張っているときにどちらか片方が手を放したら体勢を崩すだろ？ あれと同じ原理だ。

普通ならそのまま倒れるはずなんだが、もちろんこうなると予測

していた俺は彼女の後ろに立っていたので体で支えてやる。

「おい、大丈夫か？」

彼女は下から俺の方を悲しそうな表情で見ってくる。だが、それも一瞬で元の冷たいというか無表情に戻って顔をうつ向かせる。

「……決めました」

「え〜と何をでしょうか？」

「あなたが《武装者》（マスター）です」

「マスター？」

マスターは日本語で「主人」。最近「師匠」や「店主」としての意味があるが、それがどうしたのだろうか。

「あの、どういうことでしょうか？」

「あなたを私の《武装者》（マスター）として任命することです」

「WHAT？」

「残念ながらこれは決定事項です。貴方に拒否権はありません」

「WHY？」

「また《武装者》になってもらいましたので数日の間、私と共に生活してもらいます。いつ魔蟲が来てもいいように」

「really？」

「なぜさつきから発する言葉が英語なのですか？」

彼女は意外にもボケに鋭かった。いや今はそれどころではない。俺はみつともないが少し興奮していた。

この人と生活を共にするってことは、若い男と女が一つ屋根の下で暮らすってことだ。話は唐突すぎるが、俺が主人ということは彼女に何をしてもいいことになるのだろうか。俺の命令に従ってくれて…… あんなことやこんなことを——って、なにを考えているんだ俺は！ なんか力也と同じことを考えていた気がする。

「どうか致しましたか？」

「うおっ！？」

彼女はいつの間にか近づいていて上目遣いで俺の様子をうかがっ

ていた。

「な、なんでもねえから大丈夫だ！」

彼女のことを考えていたのでつい嚙んでしまうが
「そうですか。それは良かった」

彼女は特に気にしない様子で俺から距離を取る。

ああ、もう少し近くにいてくれてもいいのに。

「それではマスター。一つ質問よろしいですか？」

「ああ、なんだ」

「マスターは元気が有り余っていますか？」

「元気は有り余っているぜ」

体力は絶望的に消耗中だからな。

「少しわがままを言わせてもらっていいですか？」

「おう、いいぜ」

「ありがとうございます」

わがままつて一体なんだ？ …… まさか、彼女も俺に一目ぼれして……。俺はそこから少し妄想にふけた。

——智樹の頭脳内妄想——

「実はですね、マスター」

「なんだ？ 遠慮せずに言えよ」

「私、最初にあなたを見て落ちてしまったんです。恋に」

「奇遇だな。俺もだよ」

俺は一步步寄りそのきゃしゃな体を抱きしめる。

「きゃあ！？ マスター、人前では恥ずかしいです。離してください」

「嫌だ」

「嫌？」

「俺は君が好きなんだから」

「マスター……」

「愛してるよ」

俺はそう言う顔で近づけ唇を重ね合わせた……。

——以上が智樹くんの妄想でした——

「なーんてな、なーんてな！」

「……大丈夫ですか、マスター」

彼女に冷たい目で見られる。

そりやそうなるわな、うん。多分一気に好感度下がったな、今。

「ごふんげふん。大丈夫だ。それでわがままって言うのは？」

「はい。実はですね、マスター」

お、この展開は俺の妄想通りだ。……もしかしてあのままいっちやうのか？ そしたらどうするんだ！ うおおっ！ テンション上がってきた——！！

「私は毎日《武装者》を探していて眠れませんでした。でも、今はあなたという《武装者》を見つけてホッとしています。その安ど感から急に疲れが来てしまいこうして立っているのも限界なのです」

「……はあ」

盛り上がったテンションが一気に下がる。まあ、いいんだけどね。俺の勝手な妄想だし。

「どういたしました、マスター？」

「いやなんでもない。続けてくれ」

「はい。それで疲れを取るには睡眠が一番です。なので少々眠らせていただきます。わがままをお許しください」

そう言うとも知らない彼女は路上に座り込み目を閉じて……寝た。

マジで意味が解らん。俺にどうしろと言うのだ？

彼女の寝顔を見つめる。……危険なことには関わらない方がいい。

「……元々は関係ないんだし家に帰って寝るか」

俺は置いておいたバックを背負いなおし帰宅路を歩きだしたが、

ふと足が止まる。

待てよ……。このまま彼女をあそこに寝かしたままにしておいたら変質者や脂ぎったおっさんに連れ去られてあんなことやこんなことをされて監禁されてしまうのではないか？

それなら俺の家まで連れて帰ってやった方が……。いやそんな年相応の男子と女子が一つ屋根の下で一日でも過ごすのはいけないんじゃないか？ でも、さっき俺のことをマスターって呼んでいたし、それなら俺が「主人」なんだから別に大丈夫だよな！ いいよな！

俺はこの後何分か誰にしているのかわからない言い訳をして、結果的には自分が一目ぼれした初恋の相手をほかの野郎どもには渡したくないという気持ちに打ち負け、彼女を背負って家に帰った。

決着と契約（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。

……は？

俺の家は町の端っこの新築マンションの最上階で姉さんと二人暮らしをしている。姉さんに小さいころ聞いた話だと両親は海外を渡つての仕事をしているらしい。

親がこの家を買ったときはその広さと豪華さに喜んだが、今となつては面倒くさいの一言でしかない。ちなみに、姉さんは仕事の都合で基本、家にいない。

戦いによつて消耗されていた体力のまま人を運んで帰るのはとてもハードだった。なるべく早く彼女をベットに寝かせようと思い、彼女をベットの上に下ろす。すると、信じられないことが目の前で起こった。

なんとさつきまで人の姿をしていた彼女がどんどん小さくなっていくと思つたら、光に包まれて一本の剣になっていた。剣と言っても西洋の剣ではなく、日本刀に近い形をしていた。――って、冷静に分析している場合じゃねえ。

俺は疲れが回ってきているのかと思い、顔を洗ってからもう一度見てもやっぱり真剣のままだった。しかも、その真剣からは寝息が聞こえる。……まじでか？

「一体どうなってるんだよ！」

俺は目の前の事態についていけず頭をわさわさと掻く。

「そうだ！　これはきつと悪い夢だ！　寝たら現実の俺も目を覚ますはず！」

俺はこれが夢であることを願いにこめてベッドに入る。

第三者から見たら男子高校生と真剣と一緒に寝ているというシュールな光景になっているのだろう。

まあ、これも夢の中での出来事だ。次に目が覚めたらきつとここには俺しかいない。きつとそうだ。

……だが、もしこれが現実だつたら……？

俺はなんていうファンタジーな世界に巻き込まれてしまったんだ。なんで俺なんだよ。もう直前に大事なテストが控えているっていうのに。

そう思い元凶に当たる彼女（真剣）を見る。

あの時の彼女を思い出す。凜とした表情にりりしい目。大人の女性みたいだと思ったら子供のような負けず嫌いな部分もある。

そんな……多分、俺の初恋の彼女が隣に寝ている。真剣の形をしているがそこは気にしたら負けだろう。つまり、たまらなくうれしいのだ。

これが現実でもいいかも……。

「なに考えているんだ、俺は！ 学生は学業に集中！ 今日できなかった分は明日取り返す！ だから今日はもう寝ろ！」

そう言い聞かせ毛布を深くかぶり俺は眠りについた。

……は？（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。あと、よろしければ感想もまっています。

朝の会話

チリリリリリン、チリリリリッ。

目覚ましの音が鳴り、俺はそれを手で止める。時間を見ると珍しく寝すぎて朝の10時30分を指していた。

（少し寝すぎたかな……）

うーんと布ベッドの中で伸びをして、眠気を飛ばす。

いつもならここで顔を洗いに行くのだが、今日はそれより先に確認しなければならぬことがある。

昨日の彼女のことだ。

あれが俺の勝手な妄想劇ならいいのだが現実なら相当やばい状況になる。

俺は恐る恐るそろそろと見る。そこにあったのは――

「スー……スー……」

――裸で寝ている昨日の彼女だった。

「ええええええええ！」

俺はマンションだということを忘れて思いっきり叫んでしまう。
なんて常識のない奴だと言う人がいるかもしれないが、もし自分が同じ立場になったとしたら同じような行動を取ったに違いないだろう。これは自信を持って言えるね。

だって自分を殺そうとした犯人（美少女）が裸で自分の横で寝ているんだぜ？

こうなるに決まっているだろう。

すると、俺の声で目覚めたらしく彼女は体を起こして

「おはようございます、マスター」

相変わらずの無表情で挨拶あいさつをしてくる。

「あ、おはよう……じゃねえよ！ 体を隠せ、隠せ！」

俺も挨拶を返そうと彼女を見ると先ほどまで体を覆っていた毛布が起き上がったせいで脱げてしまっていたのだ。

そのせいで、その……大事な部分がほとんど丸見えなのである。

「別に服がないくらい、どうということはありませ——なぜ顔を隠すのですか、マスター？」

「お前が服を着ていないからだよ！早く何でもいいから着てくれ！」

俺の理性が保たれているうちに。

そんな俺の様子を見てようやく理由に気づいた彼女は

「……なるほど。そういえばマスターは健全な高校生でしたね。それで私の裸体を見ていたら興奮してしまう為、顔を隠すと」

「一応……ほとんど正解だ」

「……マスターは変態さんですね」

毛布で顔を隠しているから正確にはわからないが冷たい目で見られている気がしてならなかった……。

朝の会話（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしく願いします。感想も待っています。

マスターの変態

「わかりました。マスターが変態なので仕方ありません」

「おう、そうしてくれ」

「この服を借りますね。今までのマスターはこのままでもよかったのに」

そいつらの方がよっぽど変態じゃないのか？ も含めて頭が落ちてきてきたのかいくつかの疑問が浮かんでくる。

まず、彼女は何者なのか？ 昨日はなんだかんだで聞けなかったしな。他にも俺がなぜマスターなのか？ これは本当に現実の出来事なのか？

ちくしょう！ 考えたら余計に頭が混乱する。これじゃちが明かねえな。あとで彼女に聞いてみるか……。

俺がちょうどそう思った時、彼女は着替え終わったらしく

「もう出てきても大丈夫ですよ」

という呼びかけをしてくれた。

「わかった」

俺はクローゼットの中（数分前に移動した）から体を出して彼女が座っていた隣の椅子に腰かける。

彼女は俺の姉さんがサイズが小さくなって（主に胸の部分が）置いていった赤のセーターを着ていた。ああ、どんな服を着ていても可愛いな。しかも、近いから髪の良いにおいがこっちまで漂ってくる。……最高だ。

「……マスター、顔がにやけていますよ」

「え！？」

「また何か変なことを考えていたのですね」

「そ、そんなことないぞ！」

「……まあ、いいですが。私だから許されるものの他の女性の方今まで同じようなことはしていませんよね？」

「ねえな。お前だけだ」

他の女子には興味がないからな。俺がこんな感じになるのは彼女だけだとこれはきっぱり言える。

「それは良かったです。マスターが不埒な人なのかと思っていたので（ガタツ）」

「待て。なんで俺から一番遠い席に行くんだ？」

「マスターが私専用の変態だからです」

「やめてくれ！ もうそれ以上変態と呼ばないでくれ！」

俺は初めての恋愛感情で思った通りのまま行動してしまうだけなんだ。

決して変態なんかではないんだ！

……もしかして今まで女子に興味がなかったからこの性格が出なかっただけで、実は彼女の言う通り俺はド変態だったのか？ そしたらなんていう奴なんだ、俺は！ 男の平均を下げてしまう！

「全世界の男の皆さま！ 生まれてきてごめんなさい！」

「なぜ急に明後日の方向に謝ったのかわかりませんが落ち着いてください。今から大事な話があります」

俺は彼女のいつもより真剣な表情をする。これはよほどすごい話をするのだろう。ちゃんと聞かなければ……と思ったが、グゥ。

この音を聞いてやめた。音の主は俺ではなく彼女のものだったから。でも、彼女はいつも通りの無表情のままだった。

「……もしかして、お腹すいているのか？」

「いえ、そんなことは……」
グゥ。

今度はさっきのより音が大きくなっていた。

「……………」

「……………」

「……………何か食べに行こうか？」

「す、すいません……………」

俺は財布を手に取り、昼時には早いがファミレスに行った。

マスターの変態（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしく願いします。感想も待っています。

彼女の名前（前書き）

またまた少し文章が長くなってしまいました。すいません。

彼女の名前

「マスター、ごちそうさまでした」

「はは、良いってことよ」

乾いた笑いを浮かべる俺。口ではこう言っているが財布には大ダメージだった。彼女がファミレスで頼んだメニューは、デミグラスハンバーグ・きのこことベーコンのペペロンチーノ・サーロインステーキ・サラダ・ライス×各三皿以上など、他にもサイドメニューのデザートを頼んで合計金額は軽く3万円を突破していたレジで金額を聞いたときはぞっとしたぜ。心底、近くのコンビニで今月の仕送りを下ろしておいてよかったと思った。

で、今は昼過ぎで俺の家に帰宅したところだ。

「それでは先ほどの続きで大事な話をします」

「わかった」

「ですが、お互いにまだ相手のことをよく知りません。まず自己紹介でもしましょうか」

「そうだな。俺からでいいか？」

「ええ、どうぞ」

「俺は尾城智樹、神無月高校二年生。運動能力はゼロに近いが頭の回転なら誰にも負ける気がしない。あと、眼鏡をかけているがこれはわざと掛けている。決して目が悪いわけじゃない」

「わざと掛けているというത്？」

「俺の目は動体視力が常人離れしていて、昨日の戦いもこの目のおかげで勝ったと言っても過言ではない」

「なるほど……。そういうことでしたか」

「他には姉さんが兄弟にいるぐらいだ。これで俺の自己紹介は終わり。次はそっちの番だぜ」

「わかりました。ただ聞いても驚かないでくださいね」

いまさら何があってもほとんど驚かないと思うが。

「私は魔法の世界《魔術界》から来た魔法の剣《魔剣^{まけん}》です。人間ではありません。1000年ほど前からこの地に封印され魔蟲^{リガル}の退治に務めていました」

「魔法の世界から来た魔剣ね……」

「案外の見込みが速いのですね」

「あれだけのことがあつたらな」

命が狙われるようなことがあつたら大抵何でも受け入れることができるようになる。それに魔剣なら飛ぶ斬撃^{ざんげき}や人間離れた力にも納得がいくから、いやでも信じないといけないだろう。

……ん？ それじゃあ俺の初恋の相手って人の形をした剣になるのか！？ しかも1000年以上生きている剣に！

「なんてこった……」

あまりの悲しさに頭を抱えて悩みこんでしまう。

「頭でも痛いのですか？」

「いやなんでもない」

……待て。落ち着け。いくら相手が剣だからってこの恋はいけなものじゃないんだ。ほら、よく言うじゃないか。愛さえあれば何でもできる……と。これはきっと神様が出した試練なんだ。そういうことならこんなところで落ち込んでいる場合じゃねえぞ。

がんばれ！ 俺！

「ファイト！」

「なぜテンションが上がっているのかはわかりませんが、以上で私の自己紹介を終わります」

「そうか——って大事なことを聞いてないぞ」

「私は一応全部話したつもりなのですが」

「名前をまだ聞いていない」

「ああ、そんなことですか」

「む、そんなこととはなんだ。これから一緒にやっていくものとしてそれぐらい聞いておかないといけないだろ？」

将来的な意味も含めて。

「それで名前は？」

俺がそう聞くと彼女は一度視線を落とし、ためらいながら答える。

「……名前はまだありません」

「え？ 剣なのに名前がないのか？」

普通は魔剣や名刀には名前が付いているのになぜ彼女には名前がまだないんだ？ 1000年は生きていると言っていたのに。

すると俺の心の中を読んでいるかのように

「魔蟲を狩る為の道具に名前なんて必要ありませんから」

どこか悲しいような表情で言う。俺はその言葉に少しむかつき荒い口調でしゃべってしまう。

「そんな自分のことを道具とかいうなよ」

「道具は道具でしかありません」

「昨日は人間だったじゃねえか」

「私は深夜が明けるまでは人の姿でいられるように魔法が掛けられています。また魔剣としての能力も深夜までです。なので、私は人間ではなく人間になれる道具なのです。マスターも見たでしょう？」

私が人の姿から剣になるところを」

「そ、それはそうだが……」

「いいのです。私は所詮道具なのですから」

……むなしい、むなしすぎる。1000年以上も生きているのに道具扱い。過去のマスターにも彼女を作った魔術師にも道具扱いをされてこき使われて。

彼女を一体何だと思っているんだ。

そう思うと何もできない自分が悔しくて嫌になってくる。何か俺に出来ることはないのかと考え込むと一つのアイディアが浮かぶ。

「なあ」

「なんででしょうか？」

「俺が名前を付けてやるよ」

「そうですか。どうぞご勝手に」

そっけなく言ったつもりだろうが顔が少しほころんでいた。

「……うん、そうだな」

俺は腕を組み、頭をフル回転させた。

……………。

「全く思いつかん」

考え込んだ結果がこれだ。ネーミングセンスとか以前の問題だな。

「別にいいです。謝らなくても」

「すまん……」

せつかくのチャンスに何しているんだ。俺はバカか。

「余談はそれぐらいにして本題に入ってもいいでしょうか？ マスター」

言われてみれば、まだ自己紹介をしただけで彼女に昨日のことで聞きたいことを一個も聞けてなかった。

俺がコクリとうなずくと彼女は話しはじめた。

「私は先ほども言いましたが魔蟲を狩る為に封印から目覚めました。普段は人の姿をしています私が私は魔剣という魔蟲リガルを狩る為の武装具です。武装具と言うのは《武装者マスター》がいなければその力を発揮できません。なので私たちは《武装者》を見つけるために最初は強い人を探すのです」

「だから次々と男子高校生を狙っていたのか」

「はい。成人の方より成長して間もない高校生の方が身体能力的に言えば高いので。しかし、今の男達は弱いですね。私の太刀を避けて打ち勝ったのは唯一あなただけでしたよ」

「君が強すぎるんだよ」

最近の子供は俺みたいに運動ができない奴も多いしな。

「これぐらいできなければ魔蟲に対抗なんかできません。そう考えたらマスターは人間の中でも強い方なのですよ。人間が《武装具》に勝てることがまず異常なのです。自信を持ってください」

「そうだったのか」

いくらこの目があるからって運動神経ゼロの俺は喧嘩とか不向きだし実力も下から数えた方が速いと思っていたのに……。世の中つ

てわからないものだな。

「話が少しずつできてしまいましたね。次は私たちの敵、魔蟲についての説明をします」

「おう、頼む」

俺は彼女の話に意識を集中させた。

彼女の名前（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしく願いします。感想も待っています。

願いは告白（前書き）

受験勉強しながらの投稿。このままでいいのかと思う日々です。

願いは告白

（魔剣視点）

「話が少しずれてしまいましたね。次は私たちの敵、魔蟲^{リガル}についての説明をします」

「おう、頼む」

彼がコクリとうなずいたのを確認すると私は簡単にまとめて話しはじめる。

「魔蟲と言うのは魔術界に生息する魔物です。普段は森の中にいたりするのですがたまに強力な魔蟲が好物の人の血を求めて人間界^{こちう}にやってくるのです」

「そうなると俺の相手も強いのか」

「いえ、そういうわけではありません」

「へ？ そうなの？」

彼は予想が外れたのか素っ頓狂^{すったんきょう}な声を出す。

私はそれに構わず話を続ける。

「魔蟲は人間界^{じんぎう}へ来るときに大量の魔力を消費します。そのため魔力を蓄えるために人の体に転生して人間の血をしばらく集めないとけません。その間に倒してしまうのです」

「ふむ。その魔蟲が転生した奴が連続吸血事件の犯人でもあるのか」
「ご察しのとおりです」

彼は自分で言っていた通り頭の回転が速い。一回ごとにうるたえないから今までのマスターよりは随分とマシですね。

「あと、礼と言っては何ですか協力してくれたらマスターの願いを一つかなえて差し上げます」

「なに！？」

彼が身乗り出してくる。しかも顔がまた喜びの笑顔になってガツポーズをしていた。なぜだろう。……興味ないですが……。

「もちろん、魔蟲を退治してからですよ。どうですか？ 協力してくれませんか？」

この言葉を聞くと最近のマスターは考え込んでから渋々承諾するか情けなく断るかのどちらかです。 彼もおそらく同じ――

「協力しよう」

――ではなかった。なんていう即答なのでしょう。彼にはためらいというものはないのでしょ

うか。 私はその返事に驚きながら

「ありがとうございます」

戸惑いつつも感謝の言葉を言う。

いくら即答で答えたと言っても魔蟲の姿を見たら彼も私を捨てて逃げるでしょう。先ほども私のことを人間と言っていましたけどどうせ道具だと思っているはず。

……でも、そうだとしても、口だけだとしても……私を人としてみてくれたのは……嬉しかった。

――いけない！ そんなことを思っていたら戦いに支障をもたらしてしまう。

私は首をブンブン降るとじつと彼の方を見てみると、彼も私の方を見つめていた。私を見ている彼の瞳には温かみが、優しさがあった。その瞳にくぎ付けになる。

なんだ？ この経験したことがない感情は……。胸の中がポカポカして気持ちいい。悲しい？ 違う。悔しい？ 違う。嬉しい？ 似ているがそれ少し違う。

私自身にもわからないこの気持ち。 わからないけど……何かいい気分だ。

「フフッ」

思わず笑みがこぼれてしまう。

自然に笑ったのは幾年振りいくねんぶだろうか。心から笑ったのは幾年振りだろうか。私はおかしくなったのか？ いやそうではない。私の《武装者マスター》が、尾城智樹が私をおかしくしたのだな。今回のマスター

には困ったものだ。

「どうかしたか？」

「なんでもありません、マスター。それより協力してもらえるのならマスターの願いも先に聞いておきましょうか」

話題をそらすために私がそう言つと

「え！？」

彼の顔が引きつる。

何か私はいけないことを聞いたのだろうか。

「……ちよつとそれは言いにくい……」

「なんでもいいですよ。遠慮なく言ってください」

「……この天然小悪魔め……」

天然小悪魔？ 私のことなのだろうか。

「私は魔剣ですが小悪魔ではありません」

「わかっている。こつちの話だから気にしないでくれ」

「はあ」

マスターがそういうのであれば私はそれに従うだけだ。

「それより本当に何でもいいんだな？」

「ええ。よほどのことでなければ」

「聞いて驚くなよ。後悔するなよ」

「わかっています」

彼は呼吸を整えはつきりと告げた。

「俺と結婚を前提として付き合ってください」

その言葉を聞いた瞬間、頭の中が真っ白になった。

願いは告白（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。感想も待っています。

好きという感情（前書き）

いつも「剣と書いて初恋と呼ぼう」を読んでいたとき、ありがとうございます。お陰様で500アクセス突破しました。これからもよろしく願います。

好きという感情

予想外の願いだった。過去のマスターたちは「億万長者」おくまんちやうじや「不老不死」ふろしといった願いばかりだった。

しかし彼は違った。魔剣である私にプロポーズをしてきたのだ。普通の人ならばできない。でも彼はそれをやった。

それは私のことを本当に……人としてみているから。初めてだった。そのような人は1000以上生きてきて、出会った者の中に一人としていなかった。でも彼は違った。私を人としてみってくれた。

あまりの嬉しさに涙腺がゆるみ、涙が頬を伝う。

「な、どうした？ 俺何か変なことでも言ったか？」

彼があたふたしている。

それもそう。プロポーズした相手に泣かれたらそうなるに決まっている。

いけない。自分でもわかっているのに、

「涙が止まりません、マスター」

必死で涙を止めようとするが全く言うことを聞いてくれない。本当にどうしたのだろうか。以前ならこんなことは絶対になかった。

先ほどの感情と言い、一体なぜ？

彼に倒されたから？ 彼の人としてみてもらえたから？ 彼にプロポーズをされたから？ 頭の中が彼のことで埋め尽くされる。

……ああ……そうか……。

「大丈夫か？ ほらこのタオルで顔を拭け」

私は彼が渡してくれたタオルを受け取り顔をうずくめる。

涙を拭きとる為ではない。赤面しているであろう顔を隠すために。それは私が一つの考えに行きついたから。こんなことになる日が来るなんて到底ないと思っていた。でも、これならうまく合点がい

つまり私は彼のことが……好きになっていたのだ。どうしようもないくらいに。

「……これが恋……」

「ん？ 何か言ったか？」

「な、なにも言っていないません！」

「ぐはっ！？」

私は彼の顔にタオルを当てて遠くへ押し離す。

すると力の制御ができなかったのか彼は後ろにあったドアを突き破り、壁にめり込んだ。

これが恋の力なのだろうか？

「あの、考え込んでいるところ悪いんですけど助けてもらっていいですか？」

「あ、すいません、マスター」

あれ？ なかなか抜けない。すごい奥までめり込んでいるように引つ張つてもほとんど動かない。

しょうがない。ちょっと力を加えますか。

「せい！」

「わっ！？」

「きゃっ！？」

彼を引っこ抜いた勢いで私もと二人で倒れる。……彼が私を押し倒したような態勢で。視線が重なり合い、つい顔をそらしてしまふ。彼も同じようだ。

すぐドキドキしている。心臓の鼓動が速くなっていくのが嫌でもわかる。

……やっぱり私は恋をしているのか……。

「あの、え」と、さ

「……はい」

「こんな状況で聞くのもおかしいかもしれないけど、魔蟲を倒したら俺の願って本当に叶えてもらっていいのかなと思って」

「……」

その答えは言いたくなかった。私は彼のことがもつと知りたい。彼とずっと一緒にいたい。例え人間になれなかったとしても彼との生活はきつと楽しいことに違いないから。

でも、私は彼とはともに日々を過ごせない。なぜなら私は道具だから。

ええい！ うじうじしていてもなにもない。彼には本当のことを伝えよう。

「……残念ながらそれはできません」

「……そうか」

彼は意外とあっさりした返事をする^{まじゅっきりつ}と立ち上がりベッドの上に寝転び

「人生初の告白でフラレた——！！」

思いきり叫んだ。

「やっぱ、俺は嫌われていたか」

嫌われている？ 彼は勘違いをしている。そこだけは言うておかないと。

「あのマスター。私はマスターのことを嫌いというわけではないのです」

「じゃあ、何で？」

「私が魔蟲を倒したらまた眠りにつかないといけないと魔術規律で定められているからです^{まじゅっきりつ}」

「魔術規律？」^{まじゅっきりつ}

「はい。魔術規律とは魔術界の法律で第九条に『我々魔術界に存在する者、異世界へ在住することは世界に変化をもたらすため禁ず』と記されています^{まじゅつかい}」

「元々安定している者にイレギュラーが混ざると異変を起こして狂ってしまうってことか」

「そういうところです。私はそうしないように魔蟲を狩りマスターの願いをかなえた後、魔術界から来る私を封印するための魔術師によって封印されるのであなたの願いは実行できないというわけです」

「願いをかなえることよりもそっちの術式の方が有利なのか？」

「有利というより強力です」

「じゃあ、君は魔蟲を倒したら……」

「消えます」

「使われるだけ使われてまた消えるのか？」

「はい、私は道具ですから。逆らうことはできないようになっていきます」

「そんな……」

彼が落胆している様子がわかる。

本当は私も彼と生きていたい。けど、できない。今まで何度もこの扱いを悔しいと感じたことはあったが、こんなに思ったのは初めてだ。

私たちが結ばれることはあり得ない。こんなにもお互いに好きなのに。

だからこそ伝えておきたいことがある。

「……でも私は1000年以上前のことをすべて覚えています。その記憶の中であなたは初めてのタイプの《武装者》です」

「それってどういう意味だろ？」

「私のことを好きと。私のことを人としてみてくれた」

「なんだ、そんなことか。当たり前だ」

「今までのマスターはいざ戦いとなると私を簡単に捨てて逃げ出しました。それは私を道具扱いしていたから」

「えっ、それじゃあ今まで一人でその魔蟲とかいう化け物と戦ってきたのか？」

「はい。……だから今日は嬉しいんです。初めて私のことを大切に思ってくれる人がいる。そんなマスターがいるだけでこんなに嬉しいんだって」

「……………」

「あなたがそう言ってくれるだけで私は幸せです。だからその願いはなかったことにしてまた新しいのを考えておいてください」

「……そうか」

彼は何か言いたげそうだったが納得してくれたようだ。

「では、今日の魔蟲対策でもしましょうか。夜まで時間もあること
ですしね」

「……ああ」

外は少しずつ雲が掛かり始めていた。

好きという感情（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしく願います。あと、もうそろそろ魔蟲とのバトルに入ると思います。バトルシーン、書くの難しいなあ……。

戦いが始まる合図の悲鳴

時は夜の10時。

俺と彼女は連続吸血事件の現場である『烏丸通り』を歩いて調査していた。

もう歩き始めて1時間ぐらいが経つが特に何も起こっていない。噂によつてこの周囲を通る人が少なくなっているからだろう。

それにこの『烏丸通り』は薄気味悪く、いかにもそういう類のものが出てきそうな雰囲気だった。人を襲うには絶好の場所だろう。

「中々出てこねえな。その魔蟲とやらは」

「もうしばらく待ちましょう。私の予想が正しければ魔蟲はあと少しで転生できるだけの魔力が蓄えられるはず」

「今夜も一人は襲われる可能性は大つてことか」

「はい。と言つてもここらばかりもなんです。奥の方も行つてみましょうか」

「だな」

俺は今の状況に浮かれていた。

理由はどうあれ好きな彼女と夜の道を二人きり。これはもうデートと言つてもいいんじゃないだろうか。

……デートなら彼女と手をつないでもいいよな。

俺はそゝと自分の右手を近づけて彼女の左手を握ろうとすると

「マスター、何をしようとしているのですか？」

彼女に気づかれてバツと手を遠ざけられる。

「手をつなごうかと」

それを聞くと彼女はハアとため息をついた。

「……手をつなぎたいなら素直に言つてくれればいいですけどに……」

「何か言ったか？」

「い、いえなんでもないです！ さあ気を引き締めていきましょう！」

すたすたと歩くスピードが速くなる。

「あ、ちよつと待ってくれよ」

俺もそのスピードに合わせて歩く。

「……………」

スタスタ。

「……………」

スタスタ。

しばらくこんな沈黙が続いたが彼女がそれを破る。

「あの、マスター」

「どうした？」

「マスターは私のどんなところを好きになったのですか？」

「うおい！ 単刀直入に聞いてくるんだな」

彼女の質問はプロボクサーの右ストレートより重かった。

「はい、一応知りたかったので」

「うゝん、どんな所って言うよりも――」

「全部だよ」

「はい？ 全部？」

「そう。全部だって言ってるんだ。悪いか」

「え？ 他に何かないのですか？ こうもつとなんとというか」

「一目ぼれだったからな。一目見た瞬間好きになつてた」

「一目見たときから……………ですか。私はそんなに魅力的に見えましたか？」

「確実にトップだ」

「確実に……………トップ」

「どうした？ 顔が赤いぞ？」

「べ、別に赤くなんかなっていません」

「ふゝん、ならいいんだ」

「……………マスターはズルいです。こんな恥ずかしいことを堂々と言えるのですから」

「男ならはきはきと。当然のことだ」

そもそも好きな相手に好きということのどこがずるいんだ。わけがわからん。

「マスターみたいな人と付き合える人は幸せですね」

「そんな奴はいないと思うぞ」

「なぜですか？」

「俺は君にしか興味が無いからだ」

「っ！……本当にずるいです」

また赤面してうつむく彼女。

なぜそうなるのかわからないが楽しい。女子とのかいわってこんなにたのしいものだったか？ それとも彼女との会話だからこんなに楽しいのか？ どっちにせよ、この楽しい時間がいつまでも続けばいいと思った。魔蟲が出てこなずに彼女と一緒に暮らせたらいいとも思った。

でも世界っていうのはうまくいかないもので……。

その願いもあっさり砕かれた。

「キャアアアアア！」

どこからか女性のかん高い悲鳴が聞こえる。おそらく魔蟲に襲われたのだろう。

それと同時に彼女はＵターンして走りだした。

戦いが始まる合図の悲鳴（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。感想も待っています。

魔蟲へリガル（前書き）

やっと戦闘シーンに入りました！

魔蟲ヘリガル

「やられました！ こっちです！ 急ぎましょう！」

「お、おう！」

急な事態についていけなかったが彼女の後を追いかけると、そこには女性の首にかぶりついて血を吸っている男がいた。男の周りには彼女を助けようとした警官が数人倒れていた。全員首から上がない状態で。

「なんだよ、これ……」

こんなの力也が持つてくるゲームでしか見たことねえぞ。現実でこんなことがあっていいのかよ。

俺が驚愕していると男の体がビキビキと割れて中から巨大なクモのような頭が出てくる。

なんだ？ 何が起こっているんだ？

「まずい！ もうほとんど転生しかけている！」

「これが……魔蟲^{リガル}……」

あんなのに俺が勝てんのかよ。無理だろ。

「マスター！ 夕方に教えた作戦通りにしてください！ そしたらまだ勝てる可能性はあります！」

「わ、わかった！」

彼女の声で何とか気を保った俺。

そうだ。無理、できないの問題じゃねえ。何事もやらなければわからねえ。自分で結果を決めちゃいけないんだ。

「よし、いくぞ！ 我に誓約^{せいやく}しせし邪^{じゃ}を狩る剣よ、今、我と共に心^{しん}身^{しん}悪^{あく}に染まった者を滅せん！ 《武装》！」

先ほど教えてもらったキーワードを口にした後、彼女の下に幾何^{きかが}学的な模様をした魔法陣が描かれる。すると、昨日見たのと同じ剣の形になって俺の手元までやってくる。俺はそれをつかむと構えを取った。

夕方に彼女が立てた作戦はこうだ。

魔蟲は転生するまでに少しの時間を必要とする。その間は動けな
いらしい。そこを狙って渾身こんしんの一撃を加えて消滅させる。つまり、
先手必勝。俺の体力を考えると最善の策らしい。

「いきます！」

俺はその掛け声に合わせて男のところまで走り、大きく振りかぶ
った。

そしてこのとき一つの思いがよぎる。

このままこいつを倒したら彼女はいなくなってしまう。それなら
こいつを倒さない方がいいんじゃないのか？

そんな感情が俺の動きを遅らせる。

「マスター！」

「はっ！」

彼女【剣】の声が俺を現実に戻す。

いけない！ そんなことはどうでもいいんだ。目の前の敵を倒す
ことだけに集中しろ、尾城智樹！

「あああああ！！！」

そう叫ぶと同時に彼女【剣】を振りおろす。

しかし、その攻撃は転生しきった蜘蛛かのんに似た形をした魔蟲の太い
前足に防がれ、認識した時には全身に激痛げきつうが走っていた。

「ぐはっ！？」

魔蟲のもう一本の前足が俺の腹に見事にクリーンヒットしていた。
魔蟲がそのまま足を振り切り、俺は壁に叩きつけられる。トラック
にはねられるより痛いんじゃないかというほどの威力だ。もう一発
同じのを喰らったら確実に殺やられる。そして、俺にはもうあれを避
ける気力は残っていない。

つまり死ぬっていうことだ。こんな怪物と戦おうと思った俺がバ
カだった。

無理だ。こんなものに勝てるわけがない。

なんとか構え直してはみるが足が震えているのが嫌でもわかる。

体へのダメージもあるが魔蟲を怖いと思ってしまったからだ。

そんな俺の様子を見てどう考えたのかは知らないが

「作戦は失敗です」

彼女は武装を解いて人間の状態に戻り、その右手には初めて出会ったときに使っていた真剣が握りしめられていた。

「なんで武装を解除した！^{かいじょ}」

「作戦が失敗したからです。こうなった以上、あなたに勝ち目はありません」

「や、やってみないとわからないだろ！」

「いえ、わかります。理由はあなた自身が気づいているはず」
「っ！」

痛いところを突かれて言葉が詰まってしまふ。

確かに俺はあきらめていた。魔蟲を倒すことに対して。

この気持ちを彼女に見破られたわけだ。

「だからマスターは速くここから逃げてください。時間は私が稼ぎます」

逃げる？ 彼女をおいて？ それじゃあ過去のマスターと変わらないじゃないか。

「そんなことできるわけ——」

「いいから速く——！」

「……………くっ！」

その言葉に押されて足が動きだす。

俺はまだ戦いたかった。けど体が勝手に魔蟲とは反対方向に走り出す。

くそっ！ 俺はなんて弱くて薄情な奴なんだ。彼女は道具じゃないとか言っていたくせに、自分の命が危なくなったら結局捨てていく。

好きな女一人を守れなくてどこが男だ！ 俺はなんてやつなんだよ！

やっぱり俺なんかじゃ役不足なんだ。

……………そもそも俺は勝手に巻き込まれただけじゃないか。それを誰が責めようっていうんだ。誰も俺を責めることなんかできないさ。そうだ、俺は頑張った。もう家に帰って寝よう。
俺はがむしゃらに走りだした。

魔蟲へリガル（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。感想も待っています。

「やる」という決意

私の視界から彼が小さくなって暗闇に消えていった。

別に私は今回ばかりは憎しみの恨みもない。

私が死んでも新しい《武装具》が派遣されてこの魔蟲リガルを狩ってくれるはず。それなら彼だけは死なせなくなかった。ただその一思いだった。

「キシヤアアアア！！」

耳障りな魔蟲の声が響き渡る。

おそらくだが……私はこいつに勝てない。魔蟲の体格が見たことがないものだった。でも、数分の間なら相手をする事ができるだろう。

私は決心して彼が走って行った方向を見て

「本当にごくわずかな時間でしたが……ありがとうございました」と、つぶやき目の前の魔蟲に向かって飛び込んだ。

——俺は大通りに出たところで立ち止まっていた。未練が断ち切れなかったから。

本当にあれでよかったのか？ 彼女が魔蟲を倒したとしても孤独なまま道具のように使われるだけ。そんなことに彼女は人生をそぐ。誰かが止めないといけない。

それを俺がするはずじゃなかったのか？

例え無理だとわかっていても好きな女を守るのが男なんだろ。男は女のためだったらどんな困難でも向かわなきゃいけないだろ！

俺も男だ。ならするべきことは一つ。そうだろ？

俺はくたくたになって動けない足を無理に引きずりながら走ってきた道を引き返した。

「やる」という決意（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。感想も待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7985w/>

剣と書いて初恋と呼ぼう

2011年9月27日02時17分発行